2012年度

神奈川大学　人文学会・非文字資料研究センター 共催講演会

カメラが開く記憶の扉
中国ドキュメンタリー映画の試み

日時：2012年11月16日（金）　13:00～16:10
会場：神奈川大学横浜キャンパス23号館205教室

講師：呉文光　鄒雪平　章夢奇（ドキュメンタリー映画監督）
通訳・解説：秋山珠子（神奈川大学　非常勤講師）
開会挨拶：大里浩秋（非文字資料研究センター　研究員）

「村民映像計画」について語る呉文光氏（左）と、筆者（右）。最前列に座るのは鄒雪平氏（左）と章夢奇氏（右）。撮影：久保田桂子氏

2012年11月16日、神奈川大学人文学会と非文字資料研究センターの共催で、中国ドキュメンタリー映画のパイオニアであり、ドラマトゥルクとしても知られる呉文光、注目の若手女性監督である章夢奇、鄒雪平の3氏を迎え、講演会「カメラが開く記憶の扉―中国ドキュメンタリー映画の試み」が開催された。日中国交正常化40周年の年、尖閣列島の国有化以来、日中関係は緊張し、公的機関に属する中国人の来日キャンセルが相次ぐ中、フリーランスの彼らのフェスティバル／トーキョーによる招聘はあっさり実現し、講演には百余名の熱心な参加者が集い、予定を30分余り超える質疑応答も行われた。

呉文光―中国ドキュメンタリーを切り拓く

呉文光は1988年、国に配属された昆明のテレビ局を辞し、自由な創作を志して北京に来た。フリーランスの先駆けである呉のような若者は、当時の改革の落とし子でありながら、あくまで社会の異端的存在だった。カーキ色の綿シャツを着、黒い布靴を履いた大柄な呉は静かに口を開く。「覆い隠された社会の『真相』を描きたい―その思いは当時も今も多くの中国ドキュメンタリストが共有しています」。若き呉は独力で、自分と同様、職を捨てた地方出身の芸術家志望の友人達の日常をビデオに撮り始める。処女作『流浪北京：最後の夢想家たち』（1990）は、呉自身「予期せぬ変化」―1989年の天安門事件を跨ぐ若者達の、熱狂から沈黙への反転―を生々しく切り取り、中国ドキュメンタリーの嚆矢として高く評価される。以降呉は、文革時代の元紅衛兵達の素顔を描く『私の紅衛兵時代』（1993）や、『流浪北京』で海外に活路を求めた登場人物達の5年後の夢と現実を追う『四海我家』（1995）など、未踏のテーマの作品を次々と発表し、プロパガンダが主だった中国でドキュメンタリーの新たな地平を拓いていく。

二つのプロジェクト―小川紳介を受け継ぐ

だが、国外映画祭の寵児となった華やかで多忙な90年代、呉は個人で創作し続けることに限界と疑問を感じ出す。「ドキュメンタリーは単に監督の勲章なのか？もっと中国の現実にコミットできないのか？ そう考えた時、故・小川紳介監督の言葉が蘇りました」。1991年、初来日した呉はドキュメンタリー映画の巨人、小川紳介と邂逅する。スタジオに日参する呉に小川は、三里塚闘争や山形の農村を描いた自作を見せ、語ったという。「ドキュメンタリーは、少数の人間が作るだけでは不十分だ。より多くの参加者を集めることが大切なんだ」[1]。

2005年、呉は北京郊外に草場地工作坊（CCD）という、スタジオ、アーカイブ、上映・上演スペース兼住居を構えると、小川の言葉を実践するような活動に乗り出す。中国全土から募集した農民10人にデジタルビデオカメラ（DV）を託し各自の村で作品を撮らせるプロジェクト、「村民映像計画」を立ち上げたのだ。「それまで語る手段を持たなかった農民達は、DVを手にした途端、実に饒舌に語り出しました。晩年の小川監督は自ら田を耕しながら撮りましたが、私は農民自身に撮らせたのです」。協同性と当事者性―それが、呉が受け継いだ小川の精神ともいえる。

「プロジェクト発展には、農民に加え、教育を受けた若い世代の参加が重要でした」。2010年呉は、章夢奇と

1　この顛末は呉文光「高山を仰ぎ、なお止むことなし」（『neoneo』02：68-69）に詳しい。

鄒雪平を含む80年代生まれの若者21名をメンバーに加え、各自がゆかりの村で埋もれた記憶を記録する「民間記憶計画（メモリープロジェクト）」を始動させる。共通テーマは1959～61年に全国に及んだ飢餓の記憶。「正規の歴史からもれた、普通の人の普通の記憶を記録したいのです。飢餓の記憶の主役は、文革や反右派闘争とは異なり、知識を持たず、声を発してこなかった普通の人ですから」。

章夢奇と鄒雪平―現実と歴史の間に迷い込む

だが、若者達による記憶の記録は難航する。明るい紫のカーディガンに焦げ茶のミニスカート姿の小柄な章夢奇が口を開く。「幼い頃、離婚した母に引き取られた私は、父が育ったその村の名さえ知りませんでした」。幹線道路からの距離を示す標識だけが目印のその村を章は「47km」と呼んだ。耳が遠くインタビューが理解できない老人、収入にならない章の活動を訝しむ親族…。「村での2年間は、現実と歴史の間をさまようプロセスでした」。村での第1作『自画像：47km』（2011）の中で、舞踏家でもある章は、林立する無表情な人々の間を「丁奇！丁奇はどこ？」と絶叫しながら彷徨うパフォーマンスを行う。父の姓から丁奇と呼ばれ、「アイデンティティの分裂」に苦しんだ章は、しかし、インタビューを続ける中、徐々に村人と関係を築き、59～61年の間に村で14人が餓死したことを明らかにし、村人とともに死者のための碑を建てるに至る。続編『自画像：47kmの村で踊る』（2012）で章は、木立の中、木々に掲げられた老人達の穏やかな笑顔の写真の間を泳ぐように踊る。前作とは対照的な、静かなパフォーマンスだ。

章とは異なり、鄒雪平が撮影したのは生まれ育った村だ。だが、黄色のTシャツに緑のパーカーを羽織った鄒は言う。「撮影前、私は老人達と親しくもなく、彼らの歴史についても全く無知でした」。とは言え、顔なじみの鄒がインタビューを始めると、村人達は進んで埋もれた過去を手繰り寄せ、淡々と語り出す。「父も11歳の長男も餓死したよ。長男の名はもう忘れたがね」。鄒は証言した老人達を集め、処女作『飢餓の村』（2010）を上映する。映像を見て初めて涙ぐむ老人達は、「中国のどこで上映してもいい。事実だから」と口を揃えるが、海外上映には難色を示す。「ダメだ。国を売るみたいだろ」。だが村の小学生達に同じ映像を見せるときっぱりと言う。「外国にも同じようなことってあるよね？ これを見たら、ぼく達のこと、きっと分かってくれるはずだよ」。子供達は進んで、鄒とともに、飢餓の記憶を尋ね、老人達から寄付を集め、餓死者のための碑を建てる。最新作『子供達の村』（2012）で鄒は、呉がしたように、子供達にカメラを託し、そのプロセスを記録させている。

誰もが記憶の記録者である

碑を建てる彼らの行為に当初私は違和感を覚えた。それにより、却って記憶の固定化と風化が進むのではないか？ だが章と鄒がそれぞれの村で建てた黒い碑を見て私は虚を突かれた。ある者の生年には「?」が付され、ある者は下の名の代わりに「～氏」や「～××」と記されている。碑には、死者の姓名と生没年のみならず、記憶の欠落も刻まれていたのだ。章は慎重に言葉を綴る。「記憶は、乱雑に物が積み重なった倉庫のようなもので、急に扉を開けると中はぐちゃぐちゃになっています。でもそんな記憶を互いに照応させる作業こそが大切なんです」。冷たく硬いはずの碑は、人々が古い切れ端を持ち寄って縫い合わせる未完成のキルトのように、未来の更新に向けて柔らかくつなぎ合わされている。呉が引き取る。「民間記憶計画は大海の中に飛び込むようなものでしかないし、ドキュメンタリーは真実をめぐる個人のプロセスしか記録できないものかも知れません。でも誰もが記憶を記録することができます。プロセスをたどることで個人は責任を果たしうるのです」。

講演会後に寄せられた感想から私は、あの教室に、祖父母の記憶を記録したいと考え始めた人や、既に撮影を始めている人がいたことを知った。2013年5月、うち一人は作品を完成させ、CCDで行われた芸術祭に参加したと聞く。「誰もが記憶の記録者である」―民間記憶計画のスローガンは、国境を越え、すべての人に向けて静かに開かれている。

（文責：秋山珠子）

CCDで「民間記憶計画」について議論するメンバー

撮影をする章夢奇

章夢奇『自画像：47kmで踊る』

鄒雪平と子どもたち

鄒雪平『子供達の村』